第26回西日本事例発表オンライン研修会 発表概要シート

法人名	株式会社ハーフ･センチュリー･モア	施設名	サンシティ木津
発表タイトル	『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡 ～ 実践報告：開設から現在までの振り返り ～		
研究の目的	リハビリテーション・ケアセンターうららかにおける二年間の実践の振り返りを通して、その成果や課題を明らかにし、今後の介護付有料老人ホームにおけるリハビリテーションの方向性を模索することである。		
発表の概要	サンシティ木津では、デイサービス跡地を改修し、2020年4月より新たなリハビリテーション（以下、リハビリ）の「場」である“リハビリ・ケアセンターうららか”を開設し、運営（活動や介入）してきた。今回、これまでの二年間の活動内容を紹介するとともに、それらの振り返りを通して、その成果と今後の課題を報告する。		
研究方法	研究デザインは事例研究法である。具体的には、二年間に渡るうららかの実践内容およびリハビリ参加者の方々の声、身体機能の変化、ケアスタッフの変化などを通して、その成果や課題について考察する。		
成果･結果	実践内容の紹介：うららかには主に理学療法士（PT）３名が勤務しており、介護予防、自立支援、緩和ケアを必要とするすべての入居者を対象にリハビリを実施している。入居者の平均年齢は90.1歳、男性25人、女性68人、要介護度は自立7人、要支援11人、要介護75人であった。リハビリは入居者と PT が個々で行う個別リハビリと、集団で行う集団リハビリを実施している。 成果：入居者の変化としては、身体機能の維持や向上、介助量の軽減、緩和効果が認められた。また、集団リハビリを楽しみにしてくれるようになったり、うららかに参加することに前向きな発言がみられた。さらにコロナ禍で外出できない日々が続いたが、居住空間と隣接しているうららかに移動すること自体が、外気に触れ四季を感じる機会となっており気分転換にもなっていた。 ケアスタッフの変化としては、集団リハビリに参加するようになった（体操指導、集団リハビリのプログラムの立案と実施）だけでなく、している日常生活活動（ADL） とできる ADL の差に着目し、フロアでの過ごし方や介助の際に利用するようになった。個別・集団ともにリハビリに対し協力的になった。		
考察	うららかの実践の効果や役割：入居者の身体機能の維持・向上や各動作時の介助量の軽減、リハビリスタッフとの関係性構築や入居者間のコミュニケーションによる緩和ケアとしての役割が考えられる。また入居者の生活面をより深く知るケアスタッフが関与する事により、ケアの視点とリハビリの視点、両者の視点からアプローチでき、より各入居者に合ったリハビリの実践が可能になったと考えられる。さらに介護付有料老人ホームのリハビリは、自立支援だけでなく、緩和ケアとしての役割を担っていると考えられる。 今後の課題としては、入居者や家族とリハビリスタッフやケアスタッフとのコミュニケーションを通して、うららかのリハビリで生活の質の向上を行うかになると考えられる。		

アピールポイント 伝えたいこと	うららかのリハビリで入居者の成果（身体機能の維持・向上、介助量の軽減）を確認できた。 また、ケアスタッフにおいては、集団リハビリの実施において、徐々に各フロアのケアスタッフの協力が得られるようになった。さらには、うららかの運営にケアスタッフが携わる機会も増え、現在は一緒にプログラムを考え、お互いに協力するようになっている。多職種でリハビリを行うことで、入居者を多角的な目線で捉えることができ、より個別性の高いアプローチが可能になっている事を伝えたい。